言葉の個人的生成と社会的生成

――日本語と中国語の学習の場で――

山田克利

はじめに

人が母語を習得するときだけでなく、一応の習得が終わったあとでも、言語の生成はさらに続く。それは言葉の使い間違いなどの場合にかえってはっきりと創造的で根源的なものが観察される。言語習得の進歩について知識の面で量的に言語能力が拡大していくのは見やすい自然な傾向であるが、それに加えて、人の内面でアイディアが言語化される行動の過程で、その行動の質を支える体系の把握においても変化や進歩があると見てまちがいはないだろう。それもただ支えるというだけでなく、人の言語という行動が成立する上で、不可欠の要素として作用していると考えられる。そういう人の言語行動における精神の作用をも「言葉の生成」の過程と見て、その実際的な意味をいくつかの場面で検討考察してみたい。

言葉の生成は、人の言語という行動を成立させる必須の条件の一つである。それを意識の上に置き、目的のためのよい方法を考えることができれば、母語の使用能力においても、外国語の効果的な学習のためにも、有用な意味を持つことは疑いない。教室での日本語使用訓練や外国語学習の経験で得たことを復習しながら、ここでは、入門期を過ぎた段階で外国語学習を効果的に進めるための一つの方法として生成の持つ意味の追求を行う。特に、学習対象の言語が持つ特性を、自分がすでに学んだ点から応用し、生成的に精神を動かすことでその言語を自分の中に拡大再生産

するという面を中心において考えたい。言葉の生成という観点から、より具体的には母語認識の進化と外国人の日本語学習、日本人の中国語学習の方法を主要関心事とするものである。

言葉の社会性は、言葉の最も重要な要素の一つであり、言葉の社会的な生成も当然考える価値のある課題である。社会自体が文字通り言葉を生成することはありえず、必ず具体的な個人の精神において生成は起こるのであるが、各個人が持つ言葉は、社会的な共有を最重要な基礎としているから、個人における生成も言葉の社会的な共有から必ず影響を受ける。そうした生成が、今度は社会的に共有される要素を生むことも必ずあると考えられ、それを社会的な生成と言うことは比喩以上の意味がある。そうした言葉の生成の個人と社会の間での行き来を見、無限に繰り返されていくフィードバックの動きを、ある部分にしても意識に乗せ認識すれば、それが言語学習を進める一つの面で力になると見られる。

一　「岩音鳴りて」
――間違いから見出される創造――

「岩音鳴りて……」という言葉を見て、すぐにわかる人もあるだろうが、何のことかといぶかしく思う人もあるにちがいない。おかしいと思う人のほうが多分本来の意味の近くにいる。「イワオトナリテ」は「巌となりて」であって、「君が代」の一節である。日本語の表現技術の授業で、ある学生が意味を勘違いすることをテーマとしながらそういう例の一つとして「岩音鳴りて……」とまちがえて思い込んでいる人がいるということを発表したところ、それを聞いて子供のときからこの歌を歌いながら私もそう思っていた、「巌となりて」とは新鮮な発見だったという反応がレポートの中に見られた。このことでそういう新鮮な発見をしたのはそのレポートを書いた人ばかりではなく、世の中に相当多くいるらしい。試みにインターネットのgoogleで「岩音鳴りて」を検索してみると、数え切れないほどのサイトが現れる。そしてそういうサイトを作った人々に圧倒的に多く共通する動機はまさにその「新鮮な発見」から出ていることがわかる。

こういう「間違い」をとくに教室のような環境で気づくと、「正しい理解」を覚えて自分の知識としていきたいという反省が行われるのが普通である。それは文句のつけようのない次のレベルへの出発点とも見られるが、「岩音鳴りて」から自分が脱け出る過程を「発見」と思い「新鮮」と感じることのほうにも言葉を使う力が発展してゆく伸びやかな可能性が潜んでいる。その可能性はどういう条件の下に現実となるのか、そもそもその可能性はどうしてそう

いう可能性を持つことができるのか。

必要な知識が欠けているからこういう間違いが起こると見られやすいが、それは外側からの観察である。間違いが成り立ちうる条件という方向から見れば、知識の有無は一つの要素に過ぎない。必要な「知識」は外側にも客観的にあるものだが、「間違い」は言語という行動としては、話者の内面においてそのつど創造されるものである。「間違い」であることがかえって創造の証明となる。知識は外から内面に移されたもののコピー的な再生であるかもしれないが、間違いはそのような再生は不可能で言語行為者の精神が創造するよりほかはない。そんなにも多くの人が「岩音鳴りて」と思っているとしても、その大多数について客観的な知識として外から与えられたはずはないということができるからである。

言語という行動において人はどうしてそのような創造を行うのであろうか。それに対する最も端的な回答は言葉というのは記号だからである。記号ということは、意味や内容そのものではなくて、それに代わるものということである。意味自体であれば、それはそこに間違いなく存在するし、間違えようとしても間違えることはできず変えようと思っても変えることはできない。しかし、言葉は記号であるから、その形態は意味との関係において恣意的であるというのは言葉の大原則である。いくら大原則でも日常生活で人々はそれをほとんど意識することはないが、物質的に論理的には恣意的に変更の可能性を持つものであるという認識は意識の深い底に常に存在していると考えられる。その恣意性が恣意的に実現されてしまったら、言語によるコミュニケーションはもちろん自分の世界観も崩壊するという危機感は言葉を使う人の誰の心にもあるのであって、それ自体は世の人々の大きな共有認識である。

記号を言葉にするために、言語行動において人の精神がそのつど働いて、言葉の形式の恣意を言語としての必然としなければならない。「イワオトナリテ」を「巌となりて」あるいは「岩音鳴りて」あるいはそのほかの意味を創造しながら発声して言葉が言葉になる。私は先ほど、「間違い」に創造があるような言い方をしたが、こうして見てみれば、間違いでない場合でも、外から与えられたものの単なるコピー的な再生であるのではなく、再生的な面をも持ちながらであるにしても、話者の精神における創造は行われる。それがなければ、言葉は言葉にならない。「岩音鳴りて」ではなく「巌となりて」なのかと発見して、それを新鮮と感じたことの中には、こういう言葉を言葉として実現させる根源的な力と自分の精神の自由とのつながりを直感するものがあったのではないだろうか。

こうして言葉を言葉とする創造的な精神の働きを重ねな

がら、人は自分の言語の体系を常に生成していく。その生成の全容、あるいはそのエッセンスの全体的な記述をすることはできないが、それ自体を意識の上に載せた問題とし、その見やすい現われをとらえて検討することから言葉の生成の質を本来の意味のとおりに実現していくための方法的な手がかりは得られると思われる。「岩音鳴りて」の創造自体も生成であり「岩音鳴りて」から「巌となりて」への移行には、そうした創造を基礎におきながら生じている言葉の体系につながる生成が見やすく現れている。

「岩音鳴りて」が成立した条件を逆算的に分析して見ると、話者の精神の中で古語あるいは古文あるいは古典文法が前提されていることが分かる。現代の日本語ではないから、「岩音が」の「が」を言わないことができ、「鳴って」ではなく「鳴りて」と言えるのだと自分の創造を合理化し根拠付けしていると見られる。古語などの言語経験がなければ「岩音鳴りて」というイメージを自分の精神の中に作ることはできない。古語では現代語の助詞を使わない言い方があるとか、現代語ではラ行五段活用の動詞が「て」へつながる連用形は促音便が現れるけれど古文だから、とかの抽象的で完成した認識ははっきりしていないことが多くの場合にあるだろう。外国人の日本語学習者ならば逆に、促音便については、「第一グループの一部の動詞のテ形だから」と明確に説明できる者も多いが、「岩音鳴りて」を作ることはまずできない。母語話者は、自分の言語について半製品的な文法的な認識を持っており、それが言葉の体系の生成を推進させる要素ともなると言えよう。そしてそこから外国語学習においても、そうした「半製品的理解」を学習（＝外国語における言語体系の生成）を進める条件として方法化することも考える意義がある。不完全を土台とするのはもちろん危険があるが、意識化することでその程度は限定できるし、意識化は方法を求めるためのよい前提ともなる。

二　「情けは人のためならず」と「なる」

「情けは人のためならず」ということわざについて、多くの人の理解の仕方に「間違い」（変化？）があることは今ではよく知られていると言ってもいいだろう。よく知られることになる直接的で大きなきっかけは文化庁による平成一二年度の「国語に関する世論調査」（実施は平成一三年一月）とその結果による。それ以前から「間違い」が人目に付くようになっていたからこそ調査項目[1]にも入ったのだろうが、その結果、新しい理解の仕方が本来の意味に使うのより多数であったのはとりわけ多くの人に強い印象を与えることになったと思われる。

「間違い」ではなく「変化」、と見るにしても、言語の社

会的存在の仕方が、例えば遊び的なゆれではなく、変化した解釈のほうが多数派である、ということを数字で如実に示されると、それに衝撃を受ける人があるとしてもそれは十分理由のあることである。教室で学生が若者言葉の存在理由を主張するような場合でもほとんどいつも同じ心理的姿勢が見られる。若者である学生が若者言葉の存在理由を言う最大公約数的なものは「言葉は変化するものだ」であるが、そういう正当化に加えて「若者の間で」とか「場面を選んで」とかの「限定」がつくのが常である。「場面を選んで」というのは実践的でもあり、礼儀についてのわきまえも見せてバランス感もある姿勢で、それを言う本人の自覚的な意味にもそれがあるだろう。しかし、前節で見た「言語の創造」から考えれば、変化が日常的に多数派とか大勢とかになれば言葉が社会性の面から致命傷を受け、自分の言葉の創造のための根拠が失われる。すなわち言葉による自分の生き方が基本的に崩壊するという不安感や危機感が意識しなくても生じざるを得ないということが、そういう「限定」の本質的な基礎である。

「情けは人のためならず」はこうして、とにかく少なくとも問題への注目ということでは、社会的に認識が共有されることになったと言える。「岩音鳴りて」の場合と同じく個々人の内面でもこうした言葉の生成への萌芽があったに違いないが、「情けは人のためならず」の新解釈は、この表現が内容面で思想としてのまとまりを持つこともあって、個人の枠を超えて社会的な言葉の生成の段階に入った。現に文化庁も「意味が変化して伝わることわざ」として調査結果を言葉にしている。そういう新解釈が生じる社会的背景とか世の人情の推移とかの分析や議論が世の中でも話題となり、新解釈の定着が既定の前提とされることも目に入るようになった。しかし、拙文では、言語という行動における「創造」や言語体系の「生成」をそういう言語の外にある環境的要素が言語に与える影響とは切り離して考え、言語（と言語を言語としている人）自体の内在的論理の動きとしても見ようとするものであるが、そのレベルで見れば、新解釈も「半製品」の状態に有り、しかもなお「意味が変化して伝わることわざ」とはなりにくい要素がある。つまり、今後さらに広く一人ひとりがこの表現を言語的に行動するとき「人のためにはならない」という意味として創造していくことには大きな障害が現れてくるのではないかと見られる。

「なり」は体系のどこにいるか

文化庁の調査の選択肢に見られるような二つの解釈が生じる言語的な理由としては、否定文であることの紛らわしさも指摘されよう。本来の意味は、全否定であり、新解釈は部分否定的であって、区別が判然としにくいということ

である。それもあるにはあるが、二つの解釈を分ける明確なキーワードがあってそれは「ためならず」の「なら」である。このことわざの本来の意味では「なら」の終止形は「なり」となるもので、その現代的な言い方は「である」である。それを新解釈は「…になる」の「なる」と解することで意味が語法的に支えられている。言うまでもなく「なり」はすでに古語であり、「…になる」は現在では使用頻度の高い動詞であって、そういう言語的状況が新解釈の創造のための環境を作った。このことは、現代日本人の大人の大部分が理解できることだと言って間違いないであろう。そう思って文化庁の調査における選択肢の表現を見てみると、「ア、……ためになる」「イ、……ためにならない」と両方とも「…になる」が使われていて、「なり」である可能性を無意識のうちに排除させるという問題がある。回答者は、「(ため)である〔(ため)ではない〕」という本来の意味や概念把握の仕方を、もし半製品として頭に持っていたとしても、多分多くそれを自分で気がつかないまま追い出してから選択を行っただろう。調査のための表現の難しさを改めて思い知らされるところであるが、言語という人間の行動における創造や言語体系の生成が行われる一つの現場としてイメージし綿密に見たいことである。こうしたことを内包したまま、新解釈が社会的に生成されていけばその方向で言語創造する個人は、「一度ならず二度までも」などを使う人であれば、自分の言語体系の合理化に困難を感じることは避けられない。その表現の意味を「一度(のため)にならない」と創造することはできないだろうし、また「ほかならぬあなたのことですから」と言われても、「ほか(のため)にはならないあなた」と感じて言葉の創造が完成せず困惑するよりほかはない。「新解釈」と混在する中での「一方ならず」の今後の行方も注目される。

社会的に言語の新たな生成がある場合、それに違和感を持たず自然な使い方だと思う人が多数になれば、公認され定着していく条件ができていると言えよう。少なくとも、新たな生成が標準化される時の最大の基準である。しかし、十分条件と言うことはできず、以上に見てきたように「情けは人のためならず」も新解釈が多数派であるという調査結果が出ても、それが直ちに新たな生成を既成のこととして示しているということにはならない。その言葉が使用されることに関連することの論理関係、とりわけ言葉に内在する論理、語法についての全体的な構造において無理があれば、生成の帰趨はなおよく事実の推移を見守らなければならない。これを言葉の生成は、言語の体系の生成として起こるということの一つの現われとして見ることもできる。また、個別的な生成が論理関係から突出して起こり社会的に圧倒的多数の使用法として定着するに至って、辞典が「慣用」という注釈をつけながら採録していることも

社会が共有する経験としてある。社会はそういう経験も持つし、またある時には、関係する論理関係を意識の上に共有させながらたどり検討することもあって、それが生成の推移の方向を動かすこともある。「国語に関する世論調査」などは、社会が問題を共有意識の上に置いていることの見やすいケースであるが、実際的な場面の言語の専門家もいない状況の中で問題の共有意識が生じ、そこで何らかの言葉についての生成が動くことも、さまざまなレベルであるにちがいない。

三　「コーヒーになります」
——「なる」の難しさ、あやうさ——

現代の日本ではほかにも「なる」が、「ためならず」よりも目に見えるレベルで問題となっていることがある。関係する人々の間で相当多く意識されてもいるのだが、それは、ファミリーレストランなどで店員が注文を受けた品を客のテーブルに差し出すときに、例えば「コーヒーになります」という言い方をして時に苦情が出ることである。こういう店員の多くは大学生のアルバイトであるから、実際に経験した学生からそこで起きた問題やそこから生じた疑問や考え方などについて教室で私は話を聞く機会がかなりたくさんあった。一人がそれをテーマに発表を行えば、自分も類似の経験があると呼応する人が大体複数出る。全国的にはかなりの数の人が口にするようになっていると推定されるが、この言い方から起こる端的な問題は、それを聞いた客が「変な言い方をするな。なにからコーヒーに変わったんだ」と苦情を言うことがあり、それに対して答えようがなくて困ったということである。その困惑は当の客が「まあいい」と言ってくれても終わらない。「なにからコーヒーに変わったんだ」と言いたい疑念は実は店員自身にもあるし、いっぽう「コーヒーになります」という言い方をしたい感覚も自分の中にあるからである。

なぜそういう言い方をするのかというと、そのソースは経験者の報告からだいたい三つに分けることができる。一つは、職場の先輩たちがそう言っている、さらには、先輩からそう言うように言われた、である。二つ目は、自分が客としてコンビニなどに行ったときにそこの店員はそう言っていたように感じる。第三は、店員として仕事をする以上とにかく客を接待する言葉を使わなくてはならないと思ったというのである。第三のソースは本人自身のうちにあって、そこに創造そして生成があると見られるが、実はこれは第一の場合にも二つ目の場合にも重なって起こっていることであり、店員としての自覚と接待の誠意には共通して偽りがなく、ともにそのための表現法を目指していると考えられる。

誠意に偽りがないことは本当にそうなのであって、ぶりっ子的に言うのではない。ただ、それを相手に見える形にすることについては、方法的基準が自分の中になく、自分の外で行われている「正しさ」を求めざるを得ない。その正しさに自分の行動の形を合わせるのだがそのできるだけの正確さに、自分の誠意を置き換えようとする。あまりに皮肉な言い方かもしれないが、小学校以来先生が勝手に作る試験問題にとにかく可能な限り「正確に」答えようとしてきた長い人生経験がそこで援用されるのかもしれない。そういう場合の基準は自分の外側にあることであるから、自分が今使っている言葉が内面にもつ意味はいつもその全貌が見えず、完全なマスターは自分の力の届かないところにイメージされる。だからこそ神秘的で有難みのある原理と感じられることからの発想や、知識不足とする自覚というやはり偽りのない謙虚さが教室での発言やレポートの言葉になって出たりもする。

威張っていけないことはわかっているが、客との間の生きた接触面をどういう言葉で作っていけばいいのか、知識の面でも行動的にも経験が少なくて戸惑いは続く。冷静に事態を整理すれば、客が店ですることは四つである。一つは選ぶ・決めること、次に求めること、次に受け取ることで最後は支払いをすること。支払いの場面で若干の緊張は生じるが、店員の言葉の使い方が鋭く問題になるのは選ぶ・決めるにかかわることで、あとの二つは心配する必要はだいたいない。決定にかかわることが問題になるのだということは、多くのアルバイト店員にとって予感のような状態で精神の中に存在するのではないかと想像される。目の前の客が選ぶ・決めるをしていても、そのことからあとずさりするような感覚は自然に生じるが、知識的な用意は乏しく、そこにかかわる言葉をどう選ぶかは手探り状態である。学校で敬語を習って「尊敬」とか「謙譲」があったし、そうではなくても「丁寧」などは現に今だって自分はしているから自然に分かるけれど「決定」などというのは、習ったことがない、というふうに思っても不思議なことではないかもしれない。そこで客が「コーヒーとトースト、それから……いやそれだけでいい」と言えば、「コーヒーとトーストでよろしかったでしょうか」と店員が確認の言葉を述べることも起こるのであろう。この「よろしかった」という過去形は、新聞などで取り上げられて話題や議論の対象となったから、日本語の一つの社会的生成と言ってもよいぐらいその使用が日本のファミリーレストランや喫茶店の中に広がったと見られる。もちろん、この言葉を口にするとき話者は過去のことを言うつもりではなく、コーヒーとトーストに決めるというお客様の専権事項に自分が参加するような出すぎたマネはしませんという態度を短いセリフの意味の一部として持つふうに言葉を創造

した。そしてそれはほかの店でも同じ立場にある相当数の店員の間で共鳴が起こったのである。

コーヒーとトーストが出来上がったとき、店員は「コーヒーとトーストになります」という挨拶的セリフとともにそれを客のテーブルに差し出したとしても以上の流れから見れば言葉の生成の原理においてつながっていると言える。客が「何からコーヒーとトーストになったんだ」と言うとしても、それはいいがかりというものでお客様を尊重すればこそ私はそういったのに、という気持ちが店員には起こるだろうが、それを現実に言葉にすることはできない。客に現実に言うどころかだいたい自分自身でも自分のそういう気持ちと自分の発したその言葉が論理的にどうつながっているのか客観的な説明はできない、ただ気持ちの誠意に偽りは有りませんと思うこともあるだろう。もちろん自覚的に考えて日本語を勉強すれば説明することができる。この「なる」は「夜に入って雨になった」の「なる(変化)」ではなくて、「オシムが日本代表チームの監督をすることになったそうだ」の「なる(決定)」であって、前者のように自然などの大きな法則性が一つの現象として発現することではなくて、後者のように何か決定があってもその決定に対して私は全く受身の立場です、お客様の注文はもちろんお客様が決められたことで、そのコーヒーとトーストを作ることを決めて作ったのも私の上司の店長で、そうした私の出る幕ではない上のほうの決定の結果が今お客様のところへ返ってくるのを私が一番末端で行っていますと言ったことでしかありませんと言えば、客の苦情に対する自分の気持ちの正面からの説明となる。しかし、そういう説明を有効な行動につなげるには、言葉の社会的、個人的な生成を把握する方法を持つことが必要だろう。

決定へのかかわりと日本語における自然

こうしたシミュレーション的想定をすれば客の苦情と店員の誠意は一つ土俵に乗ることになるが、それでも互いが言葉の使い方について心地よい自由さを感じるためには考えておかなければならないことが残っている。客がヨーロッパの言語を母語とする人であれば、そもそも主語は何なんだという違和感を持つかもしれない。それには、日本語ではテーマの共有意識が主語なんです、注文の品というテーマは疑いなく共有されていますから言葉にする必要は有りませんという説明が相当有効だろう。決定について自分が受身の立場にあることを自認することが相手の優越を感じさせるということも日本の内外に通じる点がある程度あると思われる。しかし、そういう仕方での自分に対する敬意表現を客が理解したとしても、そんなことなど自分の求めていたことではないと客が改めて思い直す可能性がないとは言えない。「コーヒーになります」が自分をなめた

言い方だと感じて苦情を言ったのではない、「雨になった」とは違う用法だとはわかったが、そもそも言葉の使い方がおかしいではないかと思うかもしれない。その違和感をはっきりした形にしてみると、二つの面が考えられる。一つは本来的な言い方と違うということで、もう一つは受身だとかなんだとか自分のすること言うことから言葉づかいで逃げるなということである。本来的な言い方というのは、この場合具体的な表現法が実はあるのであって、例えば「(ご注文の)コーヒーとトーストをお持ちしました」と言えばよい。この言い方はこれまで問題にしてきたことをほぼ全面的に解決してしまう。また従来から大衆的なそば屋などでは「はいお待ちどおさま」で問題なく通用してきたと思われる。端的な「正しい言い方」を求める学生には私は「お持ちしました」を紹介するが、拙文の趣旨は「正解表」を提示することではない。「正解」を提示することよりも、同じ店のアルバイトに必要な表現である「コーヒーになります」と「おつりは一五〇円になります」を問題とされることもあるらしい二つの具体例として単純に並列する学生に「コーヒー」の「なる」はおかしいし、「おつり」の「なる」はまともだと自分の言葉で言える条件、つまり言葉の生成を把握するための考え方を提示しようとするものである。

もう一つの「逃げ」ではないか、は大きい問題である。日本語全般にかかわるとまで言えるだろうが、「なる」はそれを象徴するような言葉の一つで、日本の文化や日本人の習性に深く根を下ろした世界観・価値観とつながって言葉となっている。金田一春彦氏は日本語の「他動詞と自動詞を比べた場合、自動詞が圧倒的に多い」ということを言っているが、[2]「なる」はその自動詞のなかでも「ある」と並ぶ代表的なものである。自動詞にも人の意志を示すものもある。しかし、他動詞の持つ意志性に相反する傾向は明らかで、そういう「なる」を極端に切り詰めた言い方でほかの言葉に置き換えると「自然」であり、その反意語は「私が」である。そして自然界にも人間世界にもさまざまな「なる」があり、「病気になる」こともあるが、「成る」「木の実がなる」という意味も持つことが示すように価値観としては大きな肯定につながる基本義を持つ。「巌となりて」ももちろんそうだし、「人のためならず」について多くの人の誤解も、専門家の調査のための言葉も「なる」のほうに引っ張られたのは先に見たとおりであるが、そこでもこの言葉の日本語における深い力が動いているとも見られる。「私が」は言い換えれば「自分の判断と責任で」となるから、「なる」に実際に「逃げ」があることも多いし、自分のことでも人のことでもうすうすそれを感じながら使っていることは非常に多いと言ってよいだろう。しかも、「うすうすと」感じること自体もできるだけ避けよう

とすることが伴っており二重に「逃げ」がある。以前に日本の新聞は翌日の休刊を予告するときに「休刊日にあたりますから」と言っていたが、最近ではさすがに「明日は新聞の製作を休みます」と表現を変えた。「休刊日にあたります」の「あたる」は人の力の及ばぬ自然・宇宙の摂理の発現という意味で「なる」と同じである。言葉を使う専門家の中の専門家であり世論の公器である新聞でもこういう言葉の誘惑に引かれることがあるのだから、一般の個々の人がそこに逃げ込んだり、それを自分をだますようにして意識に載せないようにしたりするのはそれこそ日本語の自然なのかもしれない。いずれにせよ、そういう「なる」が言葉の社会的生成に具体的にかかわるとき、その生成はそうした日本人の意識の底にまで根を張る基本義からなんらかの影響を受けることは当然起こるものであるが、その意識化はそこからの自由のための第一歩となるだろう。

四　「ファミレス敬語」の社会的生成

「コーヒーになります」というような言葉づかいは、「若者言葉」として話題や議論の対象となることもあり、「ファミレス敬語」と呼ぶ人もある。上に見てきたように、話者は若者と言ってよい事情が有り、「まじ」や「きもい」や「ありえない」などを使う人々と年齢層が重なるので「若者言葉」と見られたりするのであろうが、所謂若者言葉が若者同士の間でしかも仲間意識の確認として使われるのが基本であるのに対して、ファミリーレストランの客は若者であることもあるがそれは偶然に過ぎない。若者である店員は、むしろ社会的に自分とは異なる立場に属する人として客を意識し、その違いをつなぐ言葉を戸惑いの中で発明したのである。この発明はすなわち言葉が社会的に生成される一つの姿であり、それを「ファミレス敬語」という言葉によって呼ぶことにすれば、その生成の特質をジャンル化して社会の共有意識の上に置くことができよう。

言葉の生成であるから、言葉が全体として持つ体系とつながって存在し、消滅するときはその体系からはがれ落ちるようにして死語となってゆく。「ファミレス敬語」の体系性の見やすい面は、「なる」についてやや詳しく検討してきたが、類似した性質を持つ一群の表現が関連しあって使われていることにも体系の中での生成が現れている。「……でよろしかったですか」についてはすでに触れた。このほかに「メニューのほうは……」「お席のほうは…」と不要な「ほう」を多用するので「ほうほう族」とファミレス敬語話者は揶揄されることもある。勘定のときは「千円からお預かりします」と言ってつり銭を数えるので、何を預かられてしまうのかという気持ちが多くの客の心を一瞬にしてもよぎる。こうしたファミレス敬語は、客を客と

して待遇しようとする気持ちから発しており、その表現は確かな知識や方法がもてないまま、とりあえず決定や断定から身を引いておくのが謙譲になると、ほとんど無意識に日本文化の深い伝統のなかからよりどころになりそうな振る舞い方を取り出してきて何とか形を作ったものという性格を持つ。「ほ」「う」とか「か」「ら」とか二音を付加することで、接待の労を惜しまない気持ちが示せそうだし、表現が間接化されて、危険な緊張感のある接触が客との間で生じることのクッションにもなりそうだ。この「表現の間接化」などは、「決定にかかわらない」ということとつながっていて、言葉の生成の体系において、生成が体系とともに生じることをよく示している。ファミレス敬語などは敬語ではないと言う言語の専門家もいるが、待遇表現の一種であることはまちがいない。ややとっぴな見方かもしれないが、ファミレス敬語は、ピジン言語に似ている。言語的材料や条件は不十分なまま、気持ちはあって、異種の人間との間で接触が行われ、何がしかの程度必要を充たす言葉がつくられてゆく。そして言語の方法としては未熟であったり不完全さも多く、敬語と言うことはできないと言われながらも、「ファミレス敬語」という命名が生じるほどの社会的な広がりのある言葉の生成となった。

ファミレス敬語と名づけられて、社会的に意識の共有がされるようになれば言葉の生成は次の段階に入ることもある。この言葉について現場での経験をした学生たちが教室で話してくれることには以前と比べて変化があると思われることがある。かなりの店で、店長などから「ファミレス敬語」を使わないよう注意があったり、同様のことを内容として含む接客用語マニュアルがつくられそれを勉強するよう指示があることが多くなったようだということがその一つ。また、現場でファミレス敬語を使うにしても、格式のある店の言葉とはだいぶ違うという自覚が多くのファミレス店員に生じている、ということがもう一つの変化である。こうした変化が、ファミレス敬語の今後の生成に影響を与えるのは当然予想されることである。

五　日本語の「朝三暮四」と中国語の「朝三暮四」は意味が違う

漢字を見ただけでは同じ「朝三暮四」でも、中国と日本では現在使われている意味に違いがある。中国で今使われているのは「朝令暮改」に近く、わずかな時間の間に言うことが変わるという不信感に重点がある。日本の「朝三暮四」は、高校の漢文の教科書に出典となる故事が載せられていることもよくあり、多くの人に知られている成語だが、目近な利益はわずかに後になる利益よりも実質が少なくても利益の実感が強いものだという戒めを主題にしてい

る。猿を飼う人が八つのえさを七つに減らそうとして、朝の分の三つか四つかに猿の関心をひきつけ、朝の四つを強く感じる話し方をしてえさのトータルな減少を猿に意識させないことに成功したというものである。この猿には、今日の生活に追われ続けている民衆のイメージが重なっていることは言うまでもない。成語としての意味は、猿の側に立って精神が実質を見る働きを失えば人にだまされるよ、というのが一面である。猿飼いのほうから見れば、人にものを言うには技術が大切で、それがあるだけで実質的な利益は自分の懐に入ることもあるということで、諺としての教えをこのような二つの面から要約できよう。原典の哲学には、人が言葉を使うときに概念や区別の言葉化によって認識もできれば錯覚も起こるという自戒が込められているとも理解されるが、今は言葉の社会的生成という方向からこの言葉を見てみたい。[3]

日本の朝三暮四と言っても、もちろん中国から入ったものであり、日本的理解が日本にだけあるわけではない。出典のはっきりしている言葉だから、中国でも辞典には、例えば『現代漢語詞典』では、荘子にある故事から日本的な使い方がまず説明されて、その後に「話がころころ変わることを喩えるようになった」と付け加えられているという理解の仕方が示されている。しかし、個人的な経験の範囲でのことであるが、私が実際の文章などで使われているのを見た限りでは、ほとんどいつも「話がいいように変わる」という意味であった。それは何度も中国の人（大学の先生か学生）に尋ねて確かめたことである。[4]

中国から日本に伝えられた表現が、日本で使われるときに原義とは何がしかのずれや変化が起きるのは珍しいことではない。言葉や思想が伝播していくときにそれは自然なことだとも言えよう。その一方で、中国の昔の言葉の形や発音や語義がその原形に近いままあるいは面影のようにして日本にとどめられていることもあることはある。それは裏を返せば、中国でもほかの文化や地域と同じく言葉のさまざまな面での変化・変遷が続いてきたことを意味している。それだけの認識からすれば、中国の「朝三暮四」の意味に変化が起こるのもそうした大きな法則に従うごく平凡な一例ということになるが、私にはどうも腑に落ちない点があった。中国は大変な書籍の文化を持つ国であり、その古典の中に出典を持つ言葉が変化すると世界観の持ち方で整合しにくい点が出るのではないかというのが一点。中国はまた、話しかたや交渉の技術に強い関心を持ち続けてきた文化を持つ。そのことは町の書店で説得術などをテーマとする本の量の多さや層の厚さにすぐに感じられることである。猿を飼う人の猿に対する説得術はそういう面での基本となる心構えの一つを示すものではないか、というのが二つ目の疑問点。もう一つ疑問に思うことがあって、それ

は「話が変わる」ことに対する不信を言うなら「朝令暮改」があるではないか、ということである。私がこうした疑問を中国の人に話すと、疑問に思うこと自体については同意が得られる。しかし、それでは、そういうブレーキが存在するにもかかわらず中国で「朝三暮四」はどうして変化したのかを私に説明する人に会うことはなかった。ところが、あるとき私はこの変化を起こした原因について思い至ることがあって、それを中国の人に話しても異論はないと言われるようになった。

「…三…四」の形に意味がある

「朝三暮四」の「…三…四」の部分の形に意味があるのである。しかしそうは言ってもその形の共通性を見て、日本の日常語ともなっている「再三再四」の応用を考えるとうまくいかない。私は中国に数年滞在したことがありその生活の中で中国語で同じ「…三…四」の語形でも「再三再四」ともちがう「不三不四」とか「張三李四」とかの表現を知るようになった。とりわけ八九年に北京で学生などの政治運動がおきた時に国家主席であった楊尚昆氏がそれを批判した中で「不三不四」という言葉を使ったのに強い印象を受けた。この中国語の成語的表現の内容を敢えて日本語にしてみると、「不三不四」は「あれでもないし、これでもない」「Aのカテゴリーにも入らないし、Bの概念にも属するとはいえない」ということで、結局「何か名をつけられるような代物ではない」ということである。「張三李四」は、「熊さんと八つぁん」あるいは「みいちゃんもはあちゃんも」という日本の表現と相当近いと見られる。「張」と「李」は中国の代表的な姓でここでは誰にしろ平凡なありふれた人の代名詞として使われている。結局その核心的な意味は「誰か彼か決定的に特定はしないけれど具体的な人（の誰でも）」だと言っていいだろう。「張三」には「張家の三番目の子供」「李四」には「李さんところの四人目の子」という日常生活で非常によく使われる言い方がありそれが部分を作る形になっているが、「張三李四」全体の意味とは本質的には無関係である。無関係であるが日常となじみのあるものがそこに伴うのは、無意味ということはできず、本質的でないから遊びであり、その遊びを概念のそれなりの具象化である事物とともに味を見て微妙に楽しむという面も単純に捨象すると多分中国文化や中国語の一つの要素を見落とすことになる。それでは、この語型のなかでも使用頻度がもっとも高いと見られる「説三道四」はどうか。前の二つで見たように、この語形においては、「三」「四」は不定の物や概念を例示するための簡便な代替表現として使われているだけで、順序にも量の大小にも関係のないそれぞれ一つの「もの」か「こと」である。この場合、「三」「四」が代替して示すことはやはり不定の

何かであるが「不三不四」と同じく貶義が含まれている。だから「ああだこうだとろくでもないことを言う」という意味だと受け止めてよいだろう。以上三つの「…三…四」に共通する意味を「朝三暮四」に適用してみると、「朝はああ言い夕方になればこう言う」ということで「言うことがころころ変わる」という不信の念を表現するものだという解釈にごく自然につながっていく。

不定形語句の辞書への採録

愛知大学の編纂になる『中日大辞典』には「…三…四」が、見出し項として立てられている。検索は「三」(san)を語頭にもつ言葉と同じ扱いであり、この不定形語句についての「語釈」もちゃんとしてある。不定形ではあっても、そこに内在する定型があれば、その「語義」を見ようとして精神を働かす姿勢が、言葉の学習や研究の基本にある現れであろう。「朝三暮四」の項ももちろんあって、先ほどから述べている二つの語義・用法にかかわる語釈が示されているが、「…三…四」の項との間のリファレンスの表示がないのは惜しい点である。いずれにせよ、「…三…四」という不定語形の枠である定型はそれ自体の語義をもつのではあるが、それが「朝三暮四」の意味・用法を変化させたと今確言まですることはできず、中国語の歴史の中で「…三…四」の定型として意味を持つことがいつごろ成立したか、それによって「朝三暮四」の意味が社会的にどのような経過をとりながら動いたかも、明示できない。[5] 碩学のご教示を希う次第である。

語順による意味構成法の広がり、個人の創造

中国語のこのような不定形語句に内在する定型を、辞書の見出し項にすることは、中国語の代表的辞典であり国民的な辞書である『現代漢語詞典』にもあるにはあるが『中日大辞典』とくらべるときわめて少ない。総見出し数が約六万五千ある中で、二七項、それも「七…八…」のように不定部分が語頭に来ないものばかりである。[6] したがって「…三…四」などの立項はない。同辞典は国民に中国語の規範性を示すべき強い要請もあり、不定要素を含んだ語形は規範と離れた意味があることなどの要因がそこにあるとも考えられるが、日本人が中国語を理解する最も基本的な材料としては残念な点である。語義が明確な外形をとらないままでも、そこに言葉の重要な創造や生成が行われることはあり、外国語としての中国語が行動されるとき、それがかえって意識の上に出やすいという面もある。例えば日本人の中国語理解の方法の一つとして古くからの「漢文訓読」がある。それには、「返り点」と並んで「ヲコト点」と「送りがな」が現れるが、「ヲコト点」と「送りがな」には、外国人の中国語理解のための便法というだけではな

い意味を見ることもできる。中国語は孤立語で語形変化による文法機能が少なく、語句や文の意味決定に語順が持つ比重が非常に大きい。「返り点」はその語順に日本語と中国語の間で違いが起きる場合を直接に反映したものであり、語順の違いが明確に意識されその認識を基礎において意味の創造が個人の精神においても行われながら漢文学習がされたことも多かった。言葉の創造・生成についてそういう理解のしかたがあったからこそ、明治以来の和製漢語の相当量が中国にも移され現代中国語の中に定着することもあったのだろう。この移入については近現代社会の基本語彙がそこに多く含まれることも大きな特質だが、そればかりでなく和製による造語成分が現代中国語で高い頻度で使用されていることなどは改めて注目する価値があると思われる。[7] 中国語自体にとってもその性格上、語順が文を構成する文法機能の面で意識され言われることが多いのは当然のことであるが、その「語順」は森羅万象の表現のためには、文や語句の構成要素間の関係のみならずさらに広く機能して意味を表出する要素や性格を持たなくてはならないことも自然なことである。そこからさまざまな組み合わせの「語順」が社会的に生成されてきた。不定形の語句の背景を作る場合の定型性もその重要な一つで中国語の中でそのバラエティと意味表出が非常に大きく発達したと見られる。そのような定型的語（素）の配置が援用されながら「不定形」から「定形」へと表現が完成される場合、不定型が持つ語順を「語義」としてアクティブに創造する精神の働きが一人ひとりによって行われて言葉が成り立つのである。『現代漢語詞典』での不定形語の見出し語としての立項の少なさは、背景にある定型を社会的に共有認識として表に出して見ることの少なさの反映とも考えられ、その分一人ひとりの話者はそうした言葉を使うとき個人の精神で創造的に作業を行う比重が大きかったことになる。中国語を母語とする人が、「ヲコト点」や「送りがな」を知るはずもないが、外国語としての中国語の学習や読書において日本の漢文白文の中に書き込まれる「ヲコト点」や「送りがな」を、そうした言語における個人の創造が社会的生成へとつながっていくのを目に見える姿にした一つとして考えることは意味がある。このような意味で中国語にとりわけその比重が大きいとしても、その「創造」と「生成」は言葉が言葉として存在する上で、普く必須で重要な要素であり、そのよい意識化は言葉の学習や研究に有用な方法を提供することになる。

中国語の最大の辞典である『漢語大詞典』一二巻は、その三七万余という収録語彙数の規模もさることながら、いろいろな面からの検索を可能にする別冊を持ち、とりわけCD－ROM版は不定形語が背後に定型を持つ場合の検索を大変簡便にした。それを使って「…三…四」を引いてみ

ると、この定型を持ち定形化した語の五七項が一覧表として表れ、その一つ一つの語義はもう一度クリックするだけで確かめることができる。[8] その一覧表を見るだけでも、この定型が持つ「語義」の社会的広がりが感じられるような印象を受ける。前述した「朝三暮四」の二つの意味と関係のあることをこの一覧の中に現れる意味とつないで確かめてみると、古典の故事に直接する「話（だまし）の技術」という意味の場合、「三」「四」の数には決定的な意味があるが、五六項の「…三…四」のうち「三」と「四」に数としての意味のあるものは、「朝三暮四」自体を含めて五つである。五つといっても、「再三再四」のような多数の強調のほか日本語の「桃栗三年柿八年」に似た意味のものも含めてであり、「三」と「四」を入れ替えることに意味があるのは「朝三暮四」だけである。ほかの五一語では単数ではないというニュアンスはあるが「三」「四」には数としての意味がなく、不定であることを示す「あれこれ」の代名詞として意味を持つものばかりである。このような定型自体が含有する語義を合わせて解釈すると「説三道四」を「四の五のぬかす（言う）」と訳せば訳語の表現が原語の持つ意味と深く対応しているということになるだろう。「四の五のぬかす」のように日本語では数を言う言葉が数として意味を持たずに使われることは大変少ないと思われるが、中国語では少なくとも「…三…四」の定型語群の中では、それが断然多数派である。そこでは「三」と「四」は不定のものをそのまま挙例とするための表現であり、そしてそれが示す「あれ」と「これ」は共に不定でも同じ不定のものを言うのではないという意味を「三」と「四」の違いが担っている。従って、「朝三暮四」の古典的な意味用法はこの定型語群の中においてみると孤立したものとなり、「…三…四」が「あれ」と「これ」を意味する用法が社会的に大きな流れである中で、それとの類推が容易な「朝はあれで晩ではこれと、言うことが違う」のほうに語の意味の主流の座を譲ることになったという想定が可能になる。

ただ、「あれ」と「これ」が「違う」ことは、「朝三暮四」の新義においても決定的な意味がありほかの多くの「…三…四」定型語において、「三」「四」が単に不定なものやことの種類の複数性を言うのとは、違いを残している。古典義がそのこみいった個別的な内容部分を偶然に持った表現上の定型性の故に流されながらも、原義の一部をとどめながら存在するところに言葉の社会的生成の実相の一面が見られる。

「…三…四」がもつ造語力

五六語という「…三…四」定型語もかなりの数であるが、社会の一人ひとりは自分の言語的創造力によって、さ

らにこれらとは異形の語を使うことができるにちがいない。個人的創造であってもその表現がこうした定型語群中にあることで社会的生成となることが保証される。定型であることの原理をつかんでいれば、日本人である個人が使ってもそれを聞いた中国人は違和感を持たずにその言葉を受け取るだろう。『漢語大詞典』で検索できる不定形語彙の中でも、「…三…四」の五七項はずいぶん多いほうである。この語型の中国語における造語力は強いものがあり、だからこそ「朝三暮四」の古典義は圧倒されることになったことはこれまで見てきたとおりであるが、その造語の原理や力の強さはどこにあるのであろうか。

「…三…四」の定型性のなかで、「三」と「四」が造語上果たす働きについては前節でほぼ述べた。「…」の部分はどうかというと、これにもこの語型に一定した意味を与え社会的に安定した存在とさせる大きい性格があると見られる。便宜上前の「…」を「A」、後ろの「…」を「B」とすると、「A」と「B」とは基本的に類義語であることで、「…三…四」の定型性の一部を構成している。「説三道四」の「説」と「道」はともに「言う」という意味でほぼ同義語であり「不三不四」の場合は類義語どころか同一語、「朝三暮四」の場合は「朝」と「晩」は反意語であるが、反意語ということは同一の判断基準上にあるということでその意味で類義語と見ることもでき、このように類義語の定義を拡張して考えると、「A」と「B」はこの三つの語のどれにおいても類義語となっている。この三つだけでなく『漢語大詞典』でこの語型の一覧表に挙げられた五六の「…三…四」の型を持つ語すべてが「A」と「B」に類義の語（素）を持つことが確認される。また類義である二つの「…」が類義語並列により二字で一つの語彙を社会的にいったん形成して、その語としての存在もしながらその間に「三」と「四」が割り込む形で生成・造語がおきたものもある。そういう広義の類義語が並置される中で「A」と「B」が同一語、反意語であるものは極めて少ない。ほかの語では、例えば「低三下四」、「差三錯四」のように類義語らしい類義語が置かれている。類義語らしい類義語でなく同一語であるのは「三三四四」などで四つ、反意語であるのは「朝三暮四」のほかに「東三西四」など二つ。「三三四四」は「三四」という語の繰り返し語という性格をも持ち、この語型を持つ語群の中でやや特殊であるが、いずれにせよ、「…」の位置に同一語を使うのはこの定型の中でも特殊的であり、「A」と「B」に同一語を使う方向にこの語型の定形化が伸びなかったのも中国語の性格の一面を表していると見られる。同列に並べられるが単純に同一ではなく互いに補い合う要素を持つ二つの何かを対に置くことができてこそ美しいという世界観の反映がここにあるのではないだろうか。「不三不四」の場合は同一

になってしまっているが、その出来上がった表現の語義に「ろくでもない」という意味があり、その美しくなさがそれにちょうど対応しているので社会的存在の許容があったと言ってもあながち無理ではないだろう。「A」と「B」が反意語となる「東三西四」が表現する意味は、「あの時はこう言い、今度はこう言う」ということであり「朝三暮四」の新義とほぼ同じである。こういう同義語である「東三西四」と「朝三暮四」が、他方の存在の不必要を意味することにならず、また「棲みわけ」的分業があるのでもなく、むしろ社会的存在の条件を互いに作りあっているようであるのは、興味ある言語現象である。[9]

「A」と「B」が類義であることが、この語型を造る要素として大きな条件をなしていることは、五六語の圧倒的大部分にそれがあることが示している。類義である二つのものやことがあることは、それが表す二つの類似物を並列して対を作る要素として尊重したいという社会的価値観にかなうところがあり、その要素をそなえたこの「…三…四」という語型は社会に存在する基礎を一つ持ったのだとも言える。そこからこの語型の構成要素としての「三」「四」をもう一度見てみると、「三」と「四」は「少しちがう」という概念の一つの類型の語形化としての意味を持っていることがわかる。類義を二つ並べる軸と類型をなす二つが位置する軸とを四字の語型の中でクロスさせることで、社会的な現象や真理の把握を一つの言語とすることが安定した表現の形を持てるようになった。「朝三暮四」の古典義での「三」と「四」は、「(不定である)あれ、これ」ではなく「三」と「四」は「数として違う」ことに言葉としての決定的な意味があり、それだけ特殊で個性的な内容をいうのであるが、その個別的事情に関連して出来上がった形が「…三…四」という語型にちょうどあてはまるものとなった。そして別な要請からこの語型が持つことになった社会的造語力は言葉の生成の体系がもつ力と重なっており、「朝三暮四」はそれに大きく影響されて、語型の中で個性的である古典的な語義から意味が離れることになったものである。

言葉の生成における体系性

「…三…四」という語型のなかで言葉を造る二つの軸があり、その交差点の一つ一つで言葉が生成されるのを見た。これは漢字を作る六書の一つ形成文字の「へん」と「つくり」を容易に連想させるものである。「へん」の軸における座標と「つくり」のそれとが決まるところで一つの漢字が決定する。それは一つの言葉が生成されてゆく姿の一つと言えるだろう。こうした言葉の生成の二つの系が互いに容易に連想できるということが、ある言語の生成の体系性を作る基礎をなしていると見られる。逆に言えば、そ

うした体系性が成立するからこそ、そこで言葉が生成され、造語が行われる力が生じるものと見られる。「…三…四」という語型は、この面と、対によって世界が構成されるという認識の仕方と、二つの面で中国語という体系の中で生成の系をなしている。そしてそれが「語型」であるということは、孤立語である言語において「語順」が言語としての内容を作っていく可能性の一つの姿を暗示している。その暗示の中で連想を伸ばせば、現代中国語の語彙の中で二字語が圧倒的多数であることも自然に見えてくる。一語・一音節・（一字）を基本性格としていたと見られる古代中国語が、二語の組み合わせによって語彙の広さ、意味の精度、語としての安定を生む強い力を受けて大きな生成を行いながら現代の中国語の語彙の性格を作るようになった。ここでも二つの軸がクロスするところで言葉の生成が起こり決定されるという原理が動いているとも見られる。二字（二語）の組み合わせのパターンは豊富ではあるが、中国語を母語とする多くの個人の言葉の日常的な創造に応用が可能な範囲で発展してきたと言えよう。それは、言語の生成の質において原理性を持つものであるがゆえに、個人での生成のレベルにおいては、例えば「語型」が意味を生ずるのも「形成文字」で語と字が決まるのも二字語語彙で語形と意味が安定するも一つのことという性格を持ち、一回一回の言語行為の創造に適用できるものの広さを豊富にしたと言い換えられる。

日本語となった「朝三暮四」が、中国における古典義をとどめることになったのは、日本語では二字熟語である場合や特殊な国字を除いて上に述べたような生成の力を受けることが基本的にはなかったからであるのは言うまでもない。日本語自体の持つ生成の特質が「朝三暮四」という言葉にかかわることが大変少なかったことも結果的には明らかである。その日本語を母語とする者も、中国での「朝三暮四」の現代的用法との対比から、言葉の生成の個別的な姿や大きな系とのつながり方の原理の一端を見ることができる。その意識化や認識が当を得ていれば、母語としても、外国語としても、理解は容易で深いものをつかむための方法になるというのは見やすい道理である。

結　語

言葉の使い間違いや勘違いはよく話題の種とされるが、それは反面で人は多くの場合は「勘違いしない」用法を作りながら言葉としていることを示していて、見方によっては話題としての面白さ以上の大きな意味がある。毎度の言語行為においてそうした個人の創造によって言葉が最終的に成り立つ。そうした創造は、その方法上の進化を生きた人間の精神に生じさせる。それが言語の学習であり言葉の

個人的な生成である。個人的な生成が社会的に広く共鳴を呼べば、それはその言語社会が共有する「文法」の新たな生成につながってゆく。その社会的な生成はまた個人による新たな生成のための大きな条件となることは言うまでもないだろう。

こうした言葉の生成のプロセスの中で動く力や法則性を意識することができれば、個人の「創造」や「生成」が有効に働く力を増すに違いない。それは母語の場合でも、外国語の学習においても言えることである。外国語を学ぶ場合に入門期が過ぎれば、外国語であっても、その言葉を自分のうちで生成してゆく材料や条件が人の精神のうちに蓄積される。それを有効に活用するという考え方を念頭に置きながら、拙文では、母語としての日本語、外国語としての中国語の、個人的また社会的生成の姿のいくつかを見、分析して、言語の学習や教授のための方法につなげてゆく一歩としようとした。

『漢語大詞典』で「不定形語」がある基準で検索でき、とりわけCD－ROM版で非常に簡便に不定形語群の一覧表などが得られることの意義は大変大きいものがある。その威力の一部は拙文でも紹介したが、そうした「語群」に対する「語釈」がないことについて、それには積極的な意義があることをここで強調したい。その理由は二つある。一つは、言葉は個人において創造されることがあって初めて言葉になるということである。「創造」とは「不定形」を定形にすることであり、「不定形語群の一覧表」はその創造過程を目に見えるものにした。不定形についての意識は言葉の本質的な成立の認識につながる。二つ目の理由は、インターネットである。インターネットは、「検索」があって「語釈」がないのが基本の巨大な辞書である。この辞書は辞書であると同時にこれからの人類の世界を作る大きく重要な現実であり、その現実を読むための語釈をどのように持つかは、個人の創造力と生成力による面も大変大きくなっている。

注

〈1〉この点についての調査は、二つの選択肢から選んでもらう仕方で行われた。その選択肢の表現と、それを選んだ人の比率は以下のようである。

ア、人に情けをかけておくと、巡り巡って結局は自分のためになる。……四七・二％

イ、人に情けをかけてやることは、結局その人のためにならない。……四八・七％

言うまでもないと思うが、アが本来の意味である。

〈2〉金田一春彦『日本語を反省してみませんか』角川書店、二〇〇二年、八二－八五頁。

〈3〉「朝三暮四」の出典となる古典は、「荘子」と「列子」

がある。日本では、出典として「列子」が言われることが多く（『広辞苑』第五版（岩波書店）、高校教科書『新古典講読』（右文書院））、中国では「荘子」が示されることが多いようである（『現代漢語詞典』（商務印書館）、『中華成語熟語辞海』（学苑出版社））。二つの古典の間での内容の異同は、拙論に関係しないので今は触れない。

〈4〉 試みにインターネットの「人民網」のサイトで二〇〇〇年以来の『人民日報』での使用例を検索してみると、八件のヒットがあり、そのうち七件は新義をもって使われている。

〈5〉 『漢語成語考釈詞典』（商務印書館、一九八九年）には、宋代における非古典的な用例が示されている。

〈6〉 愛…不…、不…不…、不…而…、大…特…、道…不…、非…非…、非…即…、没…没…、七…八…、且…且…、三…五…、説…道…、四…八…、似…非…、随…随…、無…無…、現…現…、一…半…、一…不…、一…而…、一…二…、一…就…、一…一…、一…再…、有…無…、有…有…、左…右…

という二七語型の見出し立項と「語釈」がある。

〈7〉 陳生保氏は『中国と日本』（麗澤大学出版会、二〇〇五年）のなかで、日本語から中国語に移入された造語力のある接尾語を二三挙げている。これは、高名凱・劉正琰両氏によって研究された基礎の上に拡充されたものであるが、「……化」、「……性」、「……主義」など現代中国語の語彙に大きい影響力を持つと思われるものが多い。

〈8〉 『漢語大詞典』のCD－ROM版により、次の五七語を、一覧表として見ることや、そこから各語を検索して語釈を読むことができる。

七十三八十四、三三四四、三四、不三不四、再三再四、半三不四、低三下四、倒三顛四、偏三向四、前三後四、勾三搭四、丟三忘四、丟三拉四、丟三拉四、丟三落四、差三錯四、唇三口四、唠三叨四、巴三覧四、張三李四、東三西四、桃三李四、横三順四、横三竪四、横三豎四、狂三詐四、求三拝四、没三没四、拉三扯四、拿三搬四、挑三揀四、挑三嫌四、挑三撥四、挑三検四、挑三豁四、捱三頂四、推三阻四、推三推四、朝三暮四、忘三迭四、急三火四、怕三怕四、瞎三話四、老三老四、緊三火四、重三疊四、重三叠四、連三並四、連三接四、遮三瞞四、言三語四、説三道四、調三惑四、調三斡四、調三窩四、顛三倒四、顧三不顧四

この五七語のうち、「三四」は、「…三…四」の型を持つとはいえない。機械的な検索で取り出されたものと見られる。

〈9〉 注〈8〉と同様にして、「朝…暮…」を検索することもでき、三三語の一覧表が見られる。この三三語は約半分ずつ、A「朝も晩も、いつも」とB「朝と晩の短いときの間に」の二種類に語義の型を分類できる。「朝三暮四」は、古典義も新義もともに、Bに属して、その語義の社会的安定を保ってきたとみられる。しかし、「朝…暮…」の語型が、「朝三暮四」の語義を決定する軸の一つとなっていたことは明らかであるが、意味の変遷にはかかわらないと思われるので本文の中では問題にしなかった。